

庭 其の

『僧都』(添水・ししおどし) 2

前号で取り上げた『僧都』に関して、複数の方から「なぜ、僧都と言うの?」と、お尋ねがありました。

僧都とは、僧の位で二番目に高い役職の名ですが、ここでの僧都は、奈良時代の終わり、奈良の「山の辺」に居たという玄賓僧都の事です。

玄賓僧都は、天皇に召される程の高徳の僧でしたが、名声を嫌い、都を出て田舎を放浪します。

人々は、山田を流転する玄賓僧都のことをいつしか山田僧都と呼ぶようになりました。備中湯川寺に滞在していた折、僧都は収穫の秋になると、農夫のいであちで田んぼに立ち、雀やカラスを追い払って農民達にとても感謝されました。童謡にもある「山田の案山子」は、案山子役を引き受けてくれた玄賓僧都のことを農民達が親しみを込めて呼んだものです。

詩仙堂の「添水」を考案した、石川丈山は、鹿や、狸を追うこの道具を、僧都の陰徳を偲んで「僧都」と名付けたという事です。



一建落着 T邸(緒方)

大切にしたいのは 住む人の“心”
家族ひとりひとりの“思い出”を
リフォームした生活空間に
そっと そそぎ込みました。



キッチンに下がっている
スタンドグラスの
ランタンは、
奥様のご実家の玄関を
照らしていた外灯です。

床は無垢のフローリング。
壁は漆喰。天井は杉板。
自然素材をふんだんに
使い、心和む空間に
仕上げました。



お母様より譲られた
ご主人の戸棚も
納まりました。



リビングとバリアフリーの縁台。
天気の良い日は、
のんびり“日なたぼっこ”



『第5回川野組研修会』が、3月13日
(火)午後5時45分より竹田市中央公
民館大会議室で、協力46社の参加の
もと開催されました。

昨年は、『第21回豊の国木造建築賞』
でこの賞始まって以来初という、最優
秀賞(柚須医院)と優秀賞(羅夢歩)
を同時受賞の栄誉をいただきました。
それだけに今回は、活発な意見交換が
なされ、「お客様にもっと良いものを。
そのためには、もう一度 原点 に戻ろ
う。」をスローガンとして研修を終え
ました。

発行人
編集

川野和男
川野組内

家造り匠の会

☎ 0974-62-2416

✉ tkk22@theia.ocn.ne.jp

🌐 <http://www6.ocn.ne.jp/~k-kawano>



なごみ

『立夏』

今年は5月6日、その明け方、
ホトトギスの初鳴きから、夏は始まるという
秋の訪れを、風の音で驚いたりもする此の国は
千年の昔から季節や景色を

見る、聞く、香る、味わう、触る、で感じてきた

露の臺に始まり、セリ、蕨、筍と大地の恵みをいただいた春
桜から、藤、木蓮、山吹、蘇芳、山法師と次々咲き競う初夏
若葉や新緑が、いよいよ目に染み、緑が深まってくる

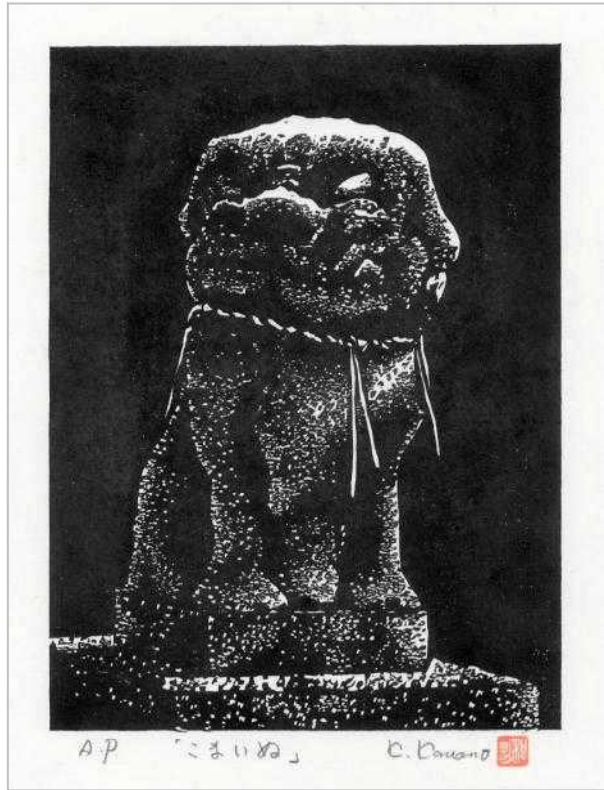
立ち止まって、ゆっくり眺めているだけで
違ったものが見えて来ないだろうか

旬の版画

穏やかな顔 厳めしい顔
かわいらしい顔 悲しげな顔
どこか ひょうきんな顔・・・

神社で目にする
こまいぬ の表情も千差万別

これは 宮砥・緩木神社の こまいぬ
どうです
なかなかのハンサム君でしょう



ちょっと記になるお話 平成の大修復(西本願寺 御影堂)

京都に在る西本願寺『御影堂』の、10年(平成11年~20年完了予定)に及ぶ修復工事が最終段階に入っています。200年に一度しか観る事の出来ない貴重な『屋根工事』の現場を、我が家造り匠の会メンバーの瓦屋さんが訪れ、直に研修して来ました。今回は、そのレポートです。



工事は、素屋根(金属)で御影堂をすっぽり覆って行われました。これはその模型です。



西本願寺最大の木造建造物『御影堂』は、今から約370年前の1636年に親鸞聖人の御影像を安置するために建てられたものです。昭和25年(1950年)には、国の重要文化財に。平成6年(1994年)には、境内地全部が、世界遺産に登録されました。

これまで、大規模な修復工事は、1800年~1810年に一度行われただけです。200年ぶりとなる今回は、前を上回る規模の『大壁工事』『建具工事』『内装・塗装工事』『屋根工事』の4つの工事が同時に施されることから『平成の大修復』とよばれています。その内の『屋根工事』は、4909.7㎡(1364坪)、総瓦枚数114810枚という桁違いの大屋根の瓦を、すべて葺き替えるというものでした。



平成12年、1年掛かりで全ての瓦を降ろし、選別作業が行われた結果、元の瓦の4割近くが、この先数百年の風雨にも十分耐えうると判断され、今回も使われました。

これまで三度現場に足を運び、研修を受けてきて、最後の今回。御影堂をすっぽりと覆っていた素屋根が解体され、建物の全景を見たとき、出来上がったばかりの大屋根の美しい曲線、見事な仕上がりに、唯々圧倒され、感動させられました。

焼酎樽ではありません。鬼瓦の足です。デカッ!!



休景たいむ 「いっぷく」時間の一枚



お昼休みの事。
せっせと庭の路を採り進んでいて、何気なく顔を上げてビックリ仰天!
なんとモミジが色付いているではありませんか。
「すわ、これも異常気象の影響か!」急ぎ女房に知らせますと、
「何言いよるの。あれは春モミジ。ああいう品種なんよ。」と、バツサリ。
えっ、物を知らぬにも程がある? ... 面目ない。

知っ得? 納得! こんな所にこんな物

《昭和32年8月14日お盆の夜。竹田署の安藤巡査は、某事件の犯人を竹田高校正門前に追いめたが、抵抗する犯人に短刀で刺され深手を負った。巡査は最後の力を振り絞り、田嶋医院まで辿り着いたものの力尽き、そのまま帰らぬ人となった。》



竹田市上町、『宇都宮染物店』の店主・敏郎さんは、家業を継ぐため、高校卒業後10年間従事した大分県の警察官の職を辞して、郷里の竹田に帰って来ました。家業を営む中、竹田警察署では、毎年5月23日に殉職した警官の慰霊祭を行っていることを知り、それに参加するうちに先の安藤巡査の話を知ったそうです。竹田では西南の役の時に非業の死を遂げた藤丸警部の話が有名で、その銅像が西光寺に奉られ語り継がれています。しかし、安藤巡査の話となると知らない人が多い事に気付き、昭和54年、私費を投じて巡査が刺された竹田高校の校門前に石碑を建て、竹田の人のため、志半ばにして無念にも凶刃に倒れた安藤警部補の御霊を供養したそうです。